

## ●捕虜の将校が書いた詩

倉橋正直

### 【1】詩そのものも出てくる

吉林省档案馆所蔵の関東軍憲兵隊資料の中に、「奉憲戦第七七号 俘虜将校ノ防諜上有害手記発見処置ニ関スル件報告 昭和十九年二月五日 奉天憲兵隊長」という資料がある。奉天捕虜収容所で、捕虜の将校が書いた詩が見つかったというものである。その事件を扱った憲兵隊の報告書とともに、日本語に翻訳された詩そのものもあった。

事件そのものは、エピソードとでもいうべき、小さなできごとであるが、捕虜の将校が書いた詩そのものまで出てきたことは、きわめて珍しいことである。それで、その詩、および、事件のあらましを紹介する。

1944年（昭和19年）1月26日、捕虜収容所側が捕虜の部屋を点検した時（それを「内務検査を実施」と表現している）、書籍（小説）に、はさんであった紙片を見つけた。それにはタイプ印刷で、詩が英文で書かれていた。詩の内容が、防諜上、有害であると認定し、没収し調査した。

その結果、英国陸軍大尉ホーナー・ロバート（俘虜番号30）が、その詩の作者であり、彼に頼まれて、米国陸軍軍曹ウィリング・ウォルター（俘虜番号1005）が、タイプで打ったことがわかった。

ホーナー大尉は満州工作機械株式会社で働かされていた。詩の内容は同会社での労役を風刺したものであった。彼は一般事務の担当で、俘虜と日本人事務員との間の連絡係にすぎなかったので、暇をもてあましていた。彼は平素から詩作に興味があった。それで、暇を見て、俘虜の境遇を観察して、それを詩に書く。できた詩を、タイプを仕事にしている同室のウィリング軍曹に頼んで、2部、タイプで打ってもらった。

手書きの原稿は破棄した。2部の内、一枚を自分が所持し、もう一枚を書籍の間に挿入しておいたのが、内務検査で発見されたというのである。

憲兵の立合の下に、米国大学出身者の村田中尉が兩名を取り調べた。ホーナー大尉に他意がないこと、また、外部には漏れていないことを確認した。しかし、この

詩が万一、本国に送付されると、有害宣伝資料になるので、両名に対して、近く懲罰処分をする予定であるという。また、満州工作機械株式会社に対しても、もっと厳しく捕虜を監視するように求めた。

## 【2】9連からなる詩

次にその詩を紹介する。本来、英語で書かれたものであるが、それは失われている。報告書に掲載するために日本語に翻訳されたものが、かろうじて残る。詩は、全部で9連からなっている。資料では、9連のうち、偶数の連だけ二字分、下げて表記している。

最後の第9連だけがひどく欠損している。しかし、残りは大体わかる。なお、原文はカタカナ表記になっているが、読みにくいので、ひらがな表記に変えた。また、(註)は、もともとあったのではなく、翻訳の際に日本側がつけたと推測される。●は、たぶん1字分の欠損。●●は、字数不明の欠損部分である。

「 満州

ある満州の 大きな市に (註、奉天)

我々俘虜は 一二〇〇名あまり

湿気のない よい所に 収容されて居ます

建物も 班も 新しいものです

半哩ばかり 離れた所に 工場 (註、満州工作機械株式会社 以下 同じ) があります

●の工場は 共栄圏に (註、日満支等の各国●

変な工作機械を供すると 誇示してゐますが

実際は 届ける事が 出来ないのです

●善意に運営してゐる この工場で

我々は 土地の農民四〇〇名と共に 汗を流してゐます

だが 其の産出量は 我々 思ふに

頂点にある 祖国の戦時生産力には 遙かに 及ばないものが あります

少数の者が 機械を使ふ 真似事をする

更に多くの者が 便所の掃除をする

然し 何をしてても 一つの厳然たる事實は

高粱と豆だけでは やって行けない事です

三種の色付の名札で 我々は 区分されてゐます (註、労務成績に依り 優良、中位、劣等に区分せるを 云ふ)

御覧の通り 赤、黄、青と

赤は 喰ひ辛棒に (註、優良者を 会社にて 増給せるを 云ふ)

黄は 不良少年に  
 青は この俺のやうな 平凡なものに 呉れるのです  
 警戒員（註、満州工作機械株式会社 警防●●  
 中には 友達（註、普通友人よりは 密接なる関● にある字を 使用する）  
 になってゐる者が 沢山ゐます  
 事件が起きると 先生等も 駈けて来るが  
 元来は トランプ賭博の方が 上手なのです  
 此所には 凡ゆる仕事があり  
 パン焼から 工場の後部にある 鋳物工場まで  
 夏は暑くて 冬は暑くないので 我々は  
 一年中 仕事を 変へたがるのです  
 それから 眼鏡さん（註、満州工作機械株式会社 稲田労務部長） 相原さん、  
 甲斐さんが ゐます  
 この人達は 仕事の監督をしないときの理由 ききます  
 警戒員（警防課員）と 事 面倒になると 駈足で やって見えて  
 真理と嘘を 通訳するのが 商売なのです  
 全体としては 左程 憂鬱なものではありません  
 ●論 飯が もっと あった方が 良いのですが  
 ●●和の来るのが遅ければ  
 ●●の門を 出るとき 俺達は 今の生活に憤り こ  
 ●●感じて出て行くと 云ふよりは 唯 身体が  
 衰弱して 出て行く丈です (了) 」

### 【3】詩の内容の分析

楊競『奉天涅槃』（瀋陽出版社、2003年、瀋陽、316頁）は、奉天捕虜収容所について書かれた貴重な本である。この詩を理解するにも役に立つ。奉天捕虜収容所に収容されていた英米両国の捕虜の人数は、最終的には2100名余になったが、しかし、詩が書かれた時期には、たしかに約1200名であった。だから、第1連の「我々俘虜は一二〇〇名あまり」という表現の通りであった。

次の「建物も 班も 新しいものです」とあるが、たしかに奉天捕虜収容所は、1943年3月6日に新しい建物が完成し、同年7月29日に移転している（前掲、楊競『奉天涅槃』、71頁。以下、頁数のみ記す。）。

第2連の工場、すなわち満州工作機械株式会社のことを、捕虜たちは英文のMMK工場という名前で見えているという（80頁）。同書に掲載されている写真を見ると、相当大きな工場であった。各種の工作機械を生産していた。同工場は工作機械を生

産し、日本のいう大東亜共栄圏内の各地に届けるといっているが、実際にはそれは不可能だとホーナー大尉は歌っている。どのような根拠をもとに、彼がこのように断言しているのか、わからない。

第3連で、「我々は 土地の農民四〇〇名と共に 汗を流してゐます」とあるように、同工場には日本人だけでなく、中国人労働者も働いていた。その数が400人であったというのである。工場に働きに来ている中国人は、臨時的に出稼ぎに来ている農民ではなく、本来の労働者だったはずである。だから、ホーナー大尉のいう「土地の農民」は間違いである。

彼はまた、同工場の生産性を祖国イギリスの工場と比較している。そして、後者のほうがずっと生産性が高いと評価している。彼の評価はたしかに正しいと思われる。

第4連で、「少数の者が 機械を使ふ 真似事をする 更に多くの者が 便所の掃除をする」と歌っている。英米両国の捕虜が同工場で働いていた。中には備えつけの機械を使って仕事をする者もいたが、それは少数であった。また、彼らの働きはそれほど効率がよくなかった。結局、まともな仕事を任せられないので、やむなく同工場に働きに来ている捕虜には、便所掃除をやらせるぐらいしかなかった。

次の「然し 何をしても 一つの厳然たる事実は 高粱と豆だけでは やって行けない事です」というのは、捕虜たちの最大の関心事である食事についてである。食事には、満州国で収穫された高粱と大豆が多く出された。肉、牛乳、卵などの副食はほとんどなく、毎日、毎日、高粱と大豆の食事が続いた。だから、捕虜たちにとって、「高粱と豆だけでは やって行けない事です」というのはまさに正しい指摘であった。

第5連の内容はおもしろい。捕虜たちを労務成績によって三つに区分し、それを色つきの名札で区別していたというのである。赤色は「優良」で、会社から見てまじめに働くものであった。彼らをホーナー大尉は「喰ひ辛棒」の人たちと表現する。理由は、優良者には、褒美として食事が増量されたからである。食事に釣られて、まじめに働いていると軽く皮肉っている。

黄色は「劣等」である。会社から見てまじめに働かないものであった。ホーナー大尉は彼らを「不良少年」と表現する。もう少年の年齢はとうに過ぎ、立派な大人になっているが、彼らの振る舞いには、どこかに不良少年を彷彿させるものがあると見たのである。

青色は「中位」である。「青は この俺のやうな 平凡なものに 呉れるのです」というから、ホーナー大尉もこのグループに入っていた。詩作を趣味にするようなタイプであるから、彼がこのグループに入っているのはたしかに自然であった。

第6連は満州工作機械株式会社の警戒員（警防課員）のことである。彼らが捕虜を

専門に管理した。警戒員の中には捕虜と格別、親しくなったものもいた。「事件が起きると 先生等も 駆けて来るが」とある。ここで、「先生等」というのは警戒員のことであろう。工場で働く捕虜たちのことで、時に事件が起きる。その時、警戒員の彼らが息せき切って、かけつけてくる。しかし、彼らは元来、工場の一角でのんびりとひねもす、トランプ賭博に興じているほうがよかったのである。

第7連は工場のようなすである。大きな工場なので、「此所には 凡ゆる仕事があり」というほど、いろいろな仕事があった。具体的にはパン焼きや鋳物工場であった。「夏は暑く 冬は暑くないので」とは変な表現であるが、要するに夏は暑く、冬は寒いということである。パン焼きや鋳物工場は、火を使うので、夏には避けたい部所であった。「我々は 一年中 仕事を 変へたがるのです」という理由である。

第8連は満州工作機械株式会社の職員の具体的な名前である。眼鏡さんこと、稲田労務部長や相原さん、甲斐さんがいた。彼らは通訳だったようである。「真理と嘘を 通訳するのが 商売なのです」と、やや皮肉をこめて彼らの仕事を紹介している。

最後の第9連は欠損部分が多く、文意をとりにくい。「全体としては 左程 憂鬱なものではありません」というのは、満州工作機械株式会社での労役を含め、捕虜生活全体を評価している。辛い捕虜生活であるが、あえて、このように総括することで、自ら慰めているのである。

「●論 飯が もっと あった方が 良いのですが」とある。文頭の「●論」は「勿論」か「無論」であろう。不自由な捕虜生活はしかたがないが、それにしても、もう少し食事の量が多ければよいのになあ！——と思わず本音が出てしまったのである。

#### 【4】「重謹慎」の処分を受ける

以上、比較的細かく、詩を分析してみた。「防諜上、有害」と憲兵隊は評価したが、これまで具体的に見てきたように、内容は基本的にはたいしたものではない。文字通り「つれづれなるままに」、自分のまわりの様子を、詩の形式で書き留めたものに過ぎない。こんな、たわいのない文書を摘発され、処分された二人は本当に気の毒であった。

前掲、楊競『奉天涅槃』の238頁から300頁にかけて、『昭和二十年度 俘虜人名簿 監視情報係』が収録されている。241頁以降はすべて英文で、俘虜の名前が掲載されている。

整理番号（これが俘虜番号になった！）、国籍・所属部隊、階級、氏名、捕虜収容所での班、就労先、備考の順で一人ずつ記されている。これを見ると、備考欄にホーナ一大尉は「重謹慎 15 日」（ほかに手書きで日本語の書き込みがあるが判読できない。242頁）、ウィリング軍曹は「重謹慎 5 日」（273頁）とある。これが、今回の事件で彼等が受けた処分であった。

捕虜に対する処罰には「重営倉」と「重謹慎」の2種類があった。「重営倉」は、狭い個室に一人だけ長期間、閉じこめられるものであった。「重謹慎」は、それに比べれば軽い処罰であった。自室でじっと座っていなければならなかった。動き回ったり、仲間と話をすることは禁じられた(118頁)。

たわいのない詩を書いたホーナー大尉が15日間、頼まれて、ただタイプで詩を打っただけのウィリング軍曹でさえ5日間、この「重謹慎」の処分を受けた。比較的軽い処罰とはいえ、二人はこのような処罰に苦しまねばならなかったのである。

## 【5】満州工作機械株式会社のこと

吉林省档案館所蔵資料に、「●務要報第一六号 奉天地区ニ於ケル勞務動態觀察」(昭和19年)がある。1944年7月、および9月に、アメリカ空軍のB 29が鞍山を空襲する。その空襲が中国人労働者にどのような影響を与えたのか。憲兵隊は、急遽、空襲の影響を、奉天市(現在の瀋陽市)で調査する。たとえば、彼らの欠勤率が急に上がったかなどである。

奉天市には当時、大工場がいくつかあった。この資料は奉天地区の主要工場で働く中国人労働者に対する調査である。満州工作機械株式会社も巨大工場の一つだったので、この調査に出てくる。

まず、「別紙第二 民族別在籍従業員数」(43頁)によれば、満州工作機械株式会社の従業員は、「日系331、鮮系0、満系620、合計951。米英俘虜約500名。」であった。また、「特殊なるものとして、満州工作機械に於ける米英捕虜約五百名の使用あるも、其の工作能率低劣にして、日系に比しては勿論、満系に比しても著しき能力低位なり。」(34頁)とも述べている。

このように、同工場には日本人工員が331名、中国人工員が620名、合計951名の従業員が働いていた。そして、同工場の特殊な条件として、これ以外に米英捕虜約500名がいた。他の工場には米英捕虜の記載がないので、彼らが働かされていたのは同工場だけだったようである。前掲の詩によれば、当時、米英捕虜は約1200名であった。そのうち、半数近い約500名が同工場で働かされていたことになる。

また、詩では、同工場には400名の中国人労働者がいると指摘されていたが、調査では620名なので、それよりやや多かった。

それから、調査は次に示すように誤差率についても述べている。誤差率とは、いわゆるオシャカ(不良品)を出す割合である。

「猶、満州工作機械に就ての誤差率表、別紙第九の如くにして、工員種別中、米英俘虜の誤差、最大にして、満系工員の約二倍に達しありて、俘虜の生産意欲の低率を示●●るか。」(39頁)

米英俘虜の誤差率はたしかに高かった(9月前半が7.5%、後半が7.0%)。日本人

工員（同時期、3.7%と3.0%）や中国人工員（同時期、3.5%と4.0%）の約2倍であった。米英俘虜の生産意欲の低さが誤差率の高さに現われたのであろう。これだけ高い誤差率では、場合によっては働かせる意味がなかった。それで、やむなく、彼らを生産現場から引き離し、便所掃除をやらせたのである。

詩の第4連で「少数の者が 機械を使ふ 真似事をする 更に多くの者が 便所の掃除をする」と歌われていた。調査が明らかにした、米英俘虜の生産意欲の低さ、及び誤差率の高さが、ホーナー大尉が作った詩のこの部分の前提になったのである。

【補注】本稿で紹介した、英人捕虜による詩のことは、『朝日新聞』（大阪本社版。2006年1月8日）で報道された。

（くらはし まさなお・愛知県立大学）